

今帰仁タイプとビロースクタイプの年代的位置付けと貿易港

金武正紀

KIN Seiki

今帰仁村教育委員会

Board of Education NAKIJIN Village

1. 今帰仁タイプの年代的位置付け

1.1. 今帰仁タイプ白磁碗と共伴陶磁器

今帰仁タイプ白磁碗との共伴陶磁器で最も注目されるのは今帰仁城跡主郭の第9層、第7層である⁽¹⁾。

今帰仁城跡主郭第9層（築城前夜）

第1図の12が今帰仁タイプI類で、その共伴陶磁器で1の青磁劃花文碗や2・3の青磁櫛描文皿（珠光青磁）など若干古いタイプも共伴しているが、4～10の青磁鎬蓮弁文碗が最も多く第9層の主体遺物と考えられる。また、11の白磁口禿碗、14の白磁口禿皿なども共伴しており、第9層の年代を考える場合、今帰仁タイプI類、青磁鎬蓮弁文碗、白磁口禿碗・皿の共伴を基準として考えたい。

今帰仁城跡主郭第7層（今帰仁城第I期）

第2・3図が第7層における白磁と青磁の共伴である。第2図1～6が今帰仁タイプである。この第7層において今帰仁タイプが最も多く、今帰仁タイプの基準層序と考えられる。共伴としては白磁口禿碗・皿（図2の11～13）が多く、共伴の主な白磁と考えられる。注目されるのは、この第7層でビロースクタイプI類（図2の7・8）とII類（図2の9・10）が登場することである。青磁では鎬蓮弁文碗（第3図2～6）が第9層に続いて多く出土しているが、ラマ式蓮弁文碗（図3の8）や弦文帯碗（図5の7）などが登場する。皿では口折の古手皿（図3の11～13）が多く、共伴皿の主体と考えられる。碗・皿以外で注目されるのは15の酒会壺である。また、16の大海茶入、17の肩衝茶入など茶入の登場も注目される。

今帰仁城跡主郭第6層と第5層（今帰仁城第II期）

第6層は造成土であるが、僅かに遺物を包含する。これは第5層からの落ち込みが多いと考えられたので、基本的には第5層の遺物と考えておいた。この層で注目されるのは今帰仁タイプI～III類は消えて、白磁大型外反碗（庄辺窯系）（図4の8）が登場することである。さらに、この時期にビロースクタイプIII類碗（図4の6・7）が登場する事も注目される。青磁では内底に印花のある外面無文の下脹れ外反碗（図5の1～6）と、高麗青磁（第5図21）が登場することも注目される。

口禿碗（図4の1）やビロースクタイプI（図4の2）、ビロースクタイプII（図4の3～5）の終末とビロースクタイプIII（図4の6・7）の登場はこの6・5層を境にして大きく変化する。第4・3層の造成層を挟んで第2・1層の白磁の主体はビロースクタイプIIIとなる。

1.2. 今帰仁タイプ白磁碗の編年

今帰仁タイプ白磁碗は今帰仁城跡主郭第9層で初めて登場（第1図12）する。その共伴遺物として第3図4の砧系鎬蓮弁文碗がある。このタイプは中国の古墓から出土しており、1272年の窖藏出土と1275年の古墓出土品が報告⁽²⁾されている。また、そのほかの鎬蓮弁文碗は13世紀末～14世紀初頃と

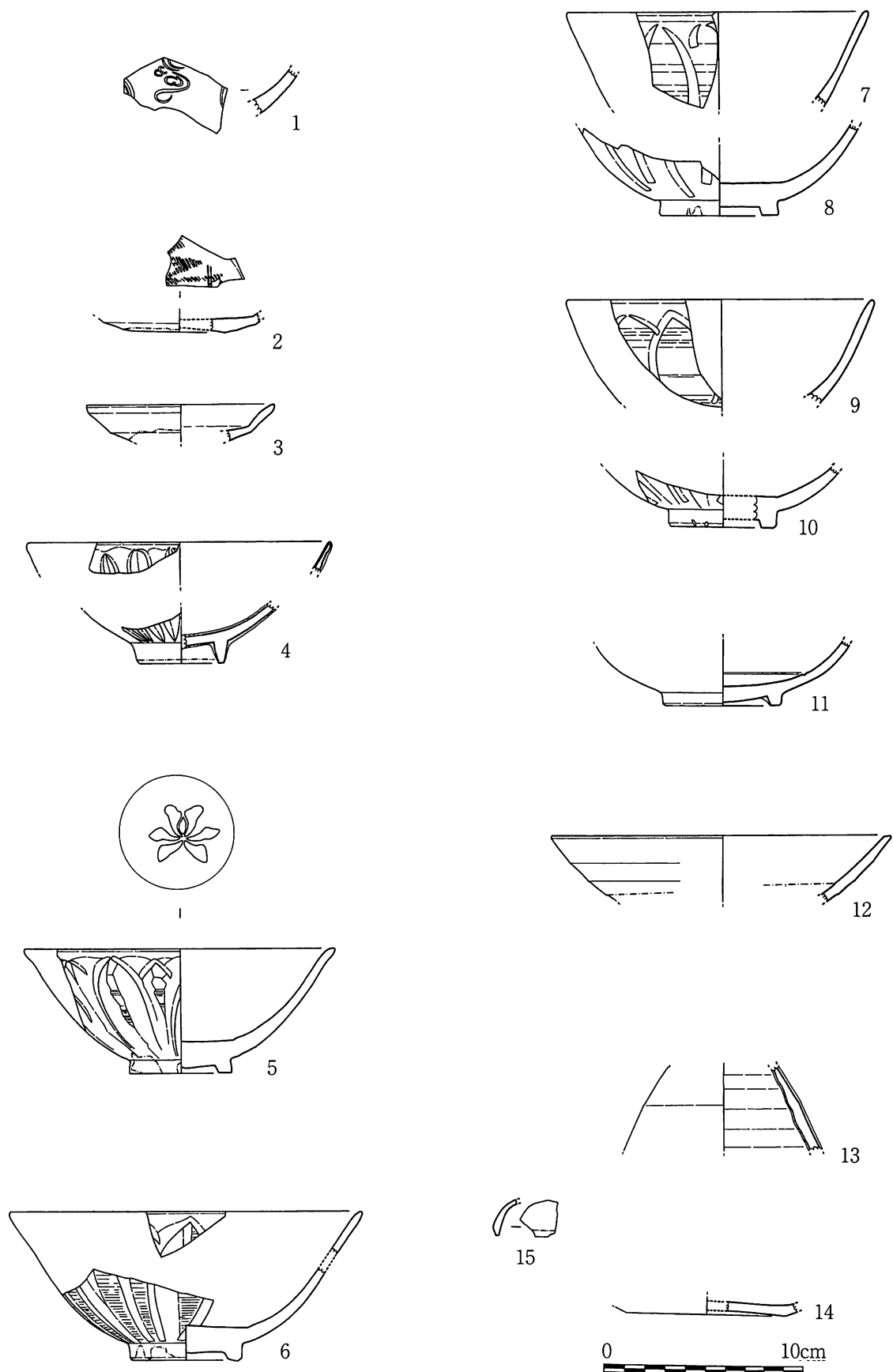


图1 今帰仁城跡主郭第9層出土陶磁器 (S = 1/3)

青磁劃花文碗(1)、青磁桐栞文皿(2·3)、青磁蓮弁文碗鉢(4~10)、白磁口禿碗(11)、今帰仁タイプI類(12)
白磁瓶(13)、白磁口禿皿(14)、青白磁合子蓋(15)

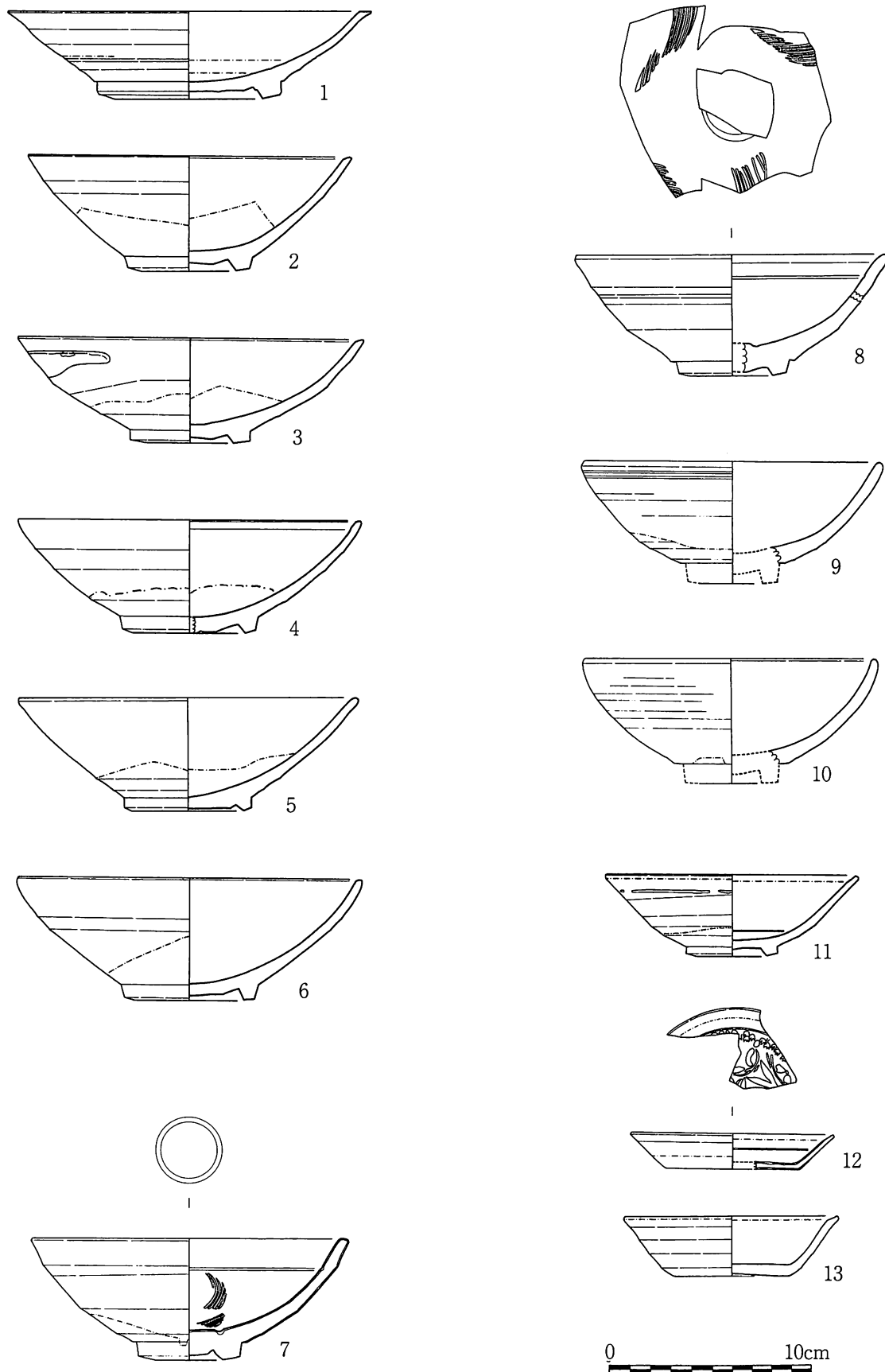


図2 今帰仁城跡主郭第7層出土陶磁器(1) (S=1/3)

今帰仁タイプ白磁碗(1~6)、ピロースクタイプ白磁碗(7~10)、白磁口禿碗(11)、白磁口禿皿(12・13)

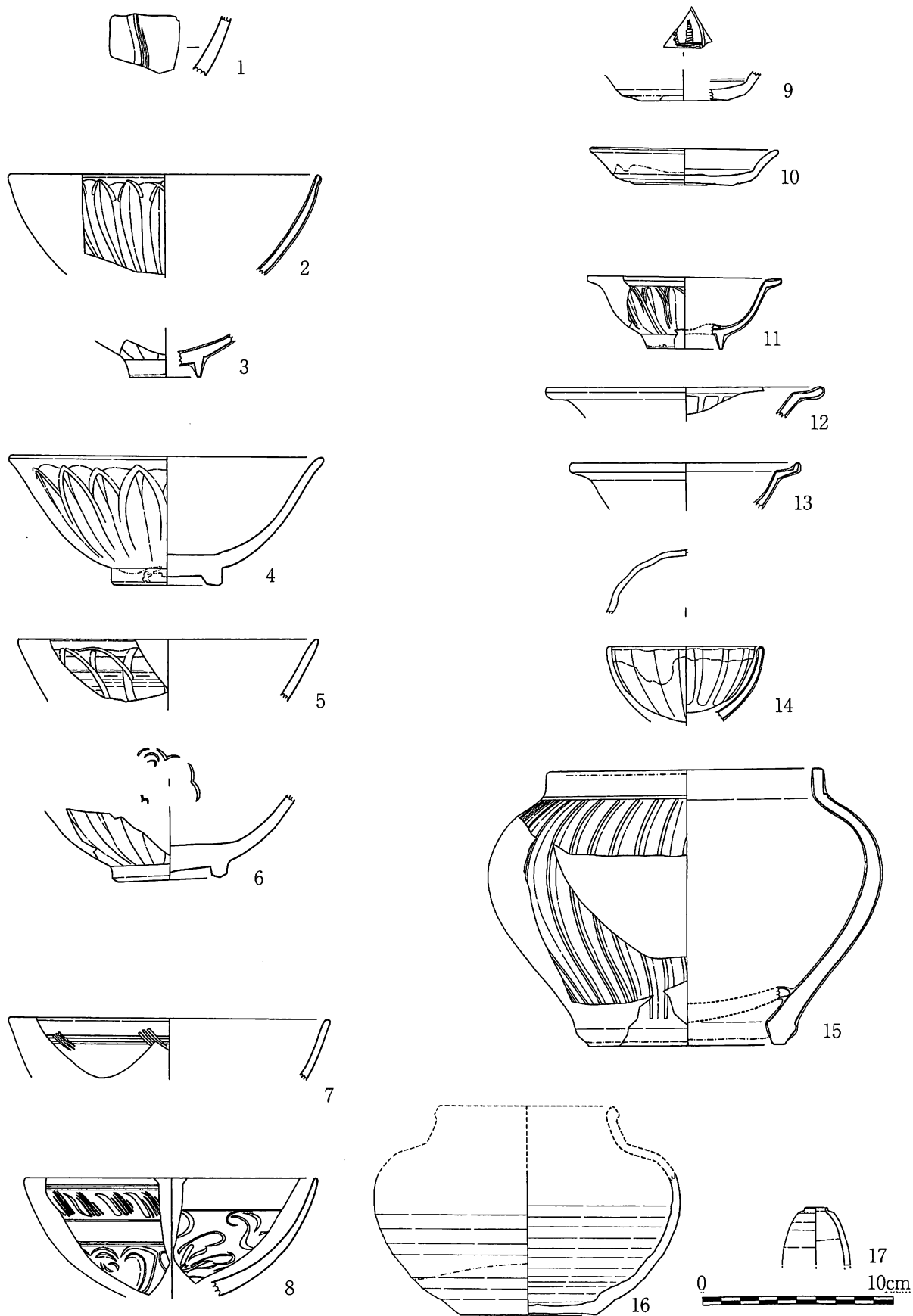


图3 今帰仁城跡主郭第7層出土陶磁器(2) (S=1/3)
 青磁劃花文碗(1)、青磁櫛描文皿(2~6)、青磁弦文帶碗(7)、青磁ラマ式連弁文碗(8)、青磁櫛描文皿(9-10)
 青磁口折皿(11~13)、青磁杯(14)、青磁酒会壺(15)、大海茶入(16)、肩衝茶入(17)

考えられていることから、今帰仁タイプが琉球へ初めて入ってきたのは13世紀後半と考えられる。

今帰仁タイプが最も大量に出土するのは第7層であり、この時期がピーク時と考えられる。第7層での共伴遺物はビロースクタイプ（図2の7～10）、青磁鎬蓮弁文碗（図3の2～6）、青磁弦文帯碗（図3の7）、青磁酒会壺（図3の15）などであるが、それと同タイプが新安沈船（1323年）の遺物⁽³⁾に多くみられる。このことをふまえ、さらに第9層との時間差なども考えて13世紀末～14世紀初頃が今帰仁タイプのピーク時と考えておきたい。

今帰仁タイプのⅠ～Ⅲ類は第7層で終り、第5層から今帰仁タイプに類似する白磁大型外反碗（庄辺窯系）（図4の8）が登場する。第5層はビロースクタイプⅠ・Ⅱ（図4の2～5）の終末とビロースクタイプⅢ（図4の6・7）が登場する時期であり、白磁大型外反碗（庄辺窯系）と共に層序的にも14世紀中頃と考えられる。

2. ビロースクタイプの年代的位置付け

2.1. ビロースクタイプ白磁碗と共伴陶磁器

共伴関係を示す最も標式的な層序は今帰仁城跡主郭の層序である。ビロースクタイプは第9層では出土していないが、第7層で初めて登場する。第2・3図でみると、今帰仁タイプ白磁碗、白磁口禿碗・皿、青磁鎬蓮弁文碗・皿など同時期の陶磁器と共伴している。また、第6・5層でも多く出土している。第6・5層は第4・5図に示しているが、ここで最も注目されるのは今帰仁タイプは姿を消して、ビロースクタイプⅢ類「外反碗」が登場することである。

第5図1～7はまとめて埋められた祭祀遺物と考えられる一括遺物である。この中の青磁碗は新安沖沈船の遺物と同類である。また、図5の21の高麗青磁杯も年代を決める陶磁器である。

第2層や第1層になると、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は伝世品的に僅かに出土するが、ビロースクタイプⅢ類が大量に出土し、今帰仁城の最も隆盛期を代表する白磁碗となる。

2.2. ビロースクタイプ白磁碗の編年

ビロースクタイプの編年で最も重要な層序は今帰仁城跡主郭の第7層、第6・5層、第2層下部⁽¹⁾である。最下層の第9層（13世紀後半）では出土していないが、第7層で最初に登場する。ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は新安沈船（1323年）の積荷にもみられることと⁽²⁾、今帰仁における第9層との時間差を考慮して13世紀末～14世紀前半と考えられる。

これまで白磁外反碗と呼んでいたビロースクタイプⅢを編年する場合、今帰仁城跡主郭第5層と第2層下部の出土状況が注目される。第9層や第7層では出土していないビロースクタイプⅢが第5層で初めて登場する。第5層は14世紀中頃の層であり、14世紀中頃に初めて琉球に入ってきたと考えられる。そして、第2層下部である。この層が中国の『明實録』の「太祖實録」「太宗實録」⁽⁴⁾に登場する山北王の時代の初期頃である。第2層下部では伝世品と考えられる今帰仁タイプⅡ類（図6の1）が1点とビロースクタイプⅡ（図6の2・3）が2点出土しているが、ビロースクタイプⅢ（図6の4～8）が大量に出土しており、ビロースクタイプⅠ・Ⅱにかわって、Ⅲ類の時代と考えられる。これらのことから、ビロースクタイプⅢ類は14世紀中頃～15世紀初頃と考えられる。

3. 今帰仁タイプとビロースクタイプの生産地調査の成果

2007年9月2日～9日、福建省の古窯調査に参加した。これは熊本大学文学部木下尚子教授を代表とする日中共同研究「13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究－中国福建省を中心

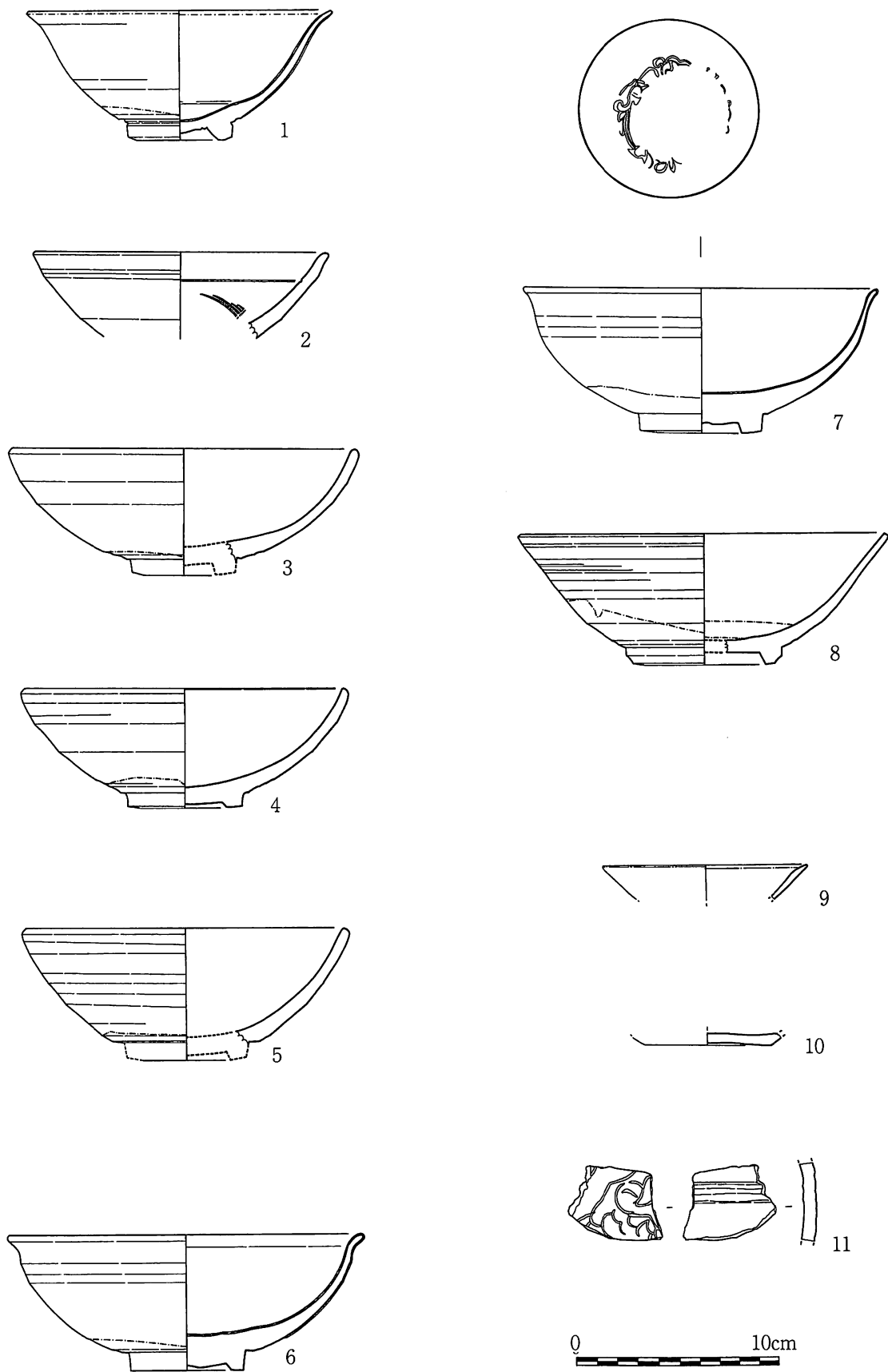


図4 今帰仁城跡主郭第6・5層出土陶磁器(1) (S=1/3)
 白磁口禿碗(1)、ピロースクタイプ(2~7)、白磁大型外反碗(8)、白磁口禿皿(9・10)、白磁瓶(11)

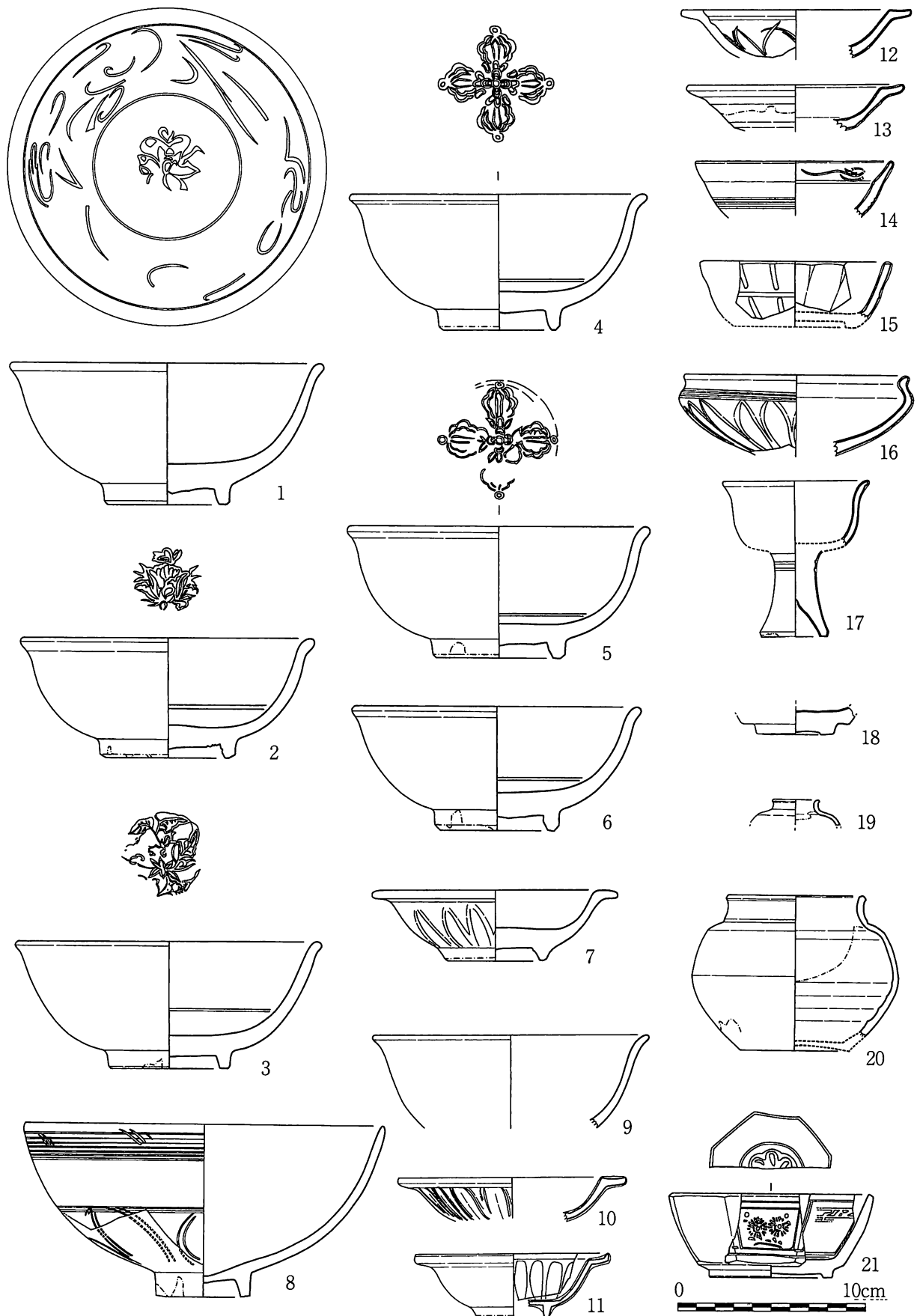


图5 今帰仁城跡主郭第6・5層出土陶磁器(2) (S=1/3)

青磁碗・皿一括遺物(1~7)、青磁弦文帶碗(8)、青磁無文外反碗(B窯系)(9)、青磁口折皿(10~14)、
青磁杯(15~17)、天目茶碗(18)、肩衝茶入(19)、大海茶入(20)、高麗青磁杯(21)

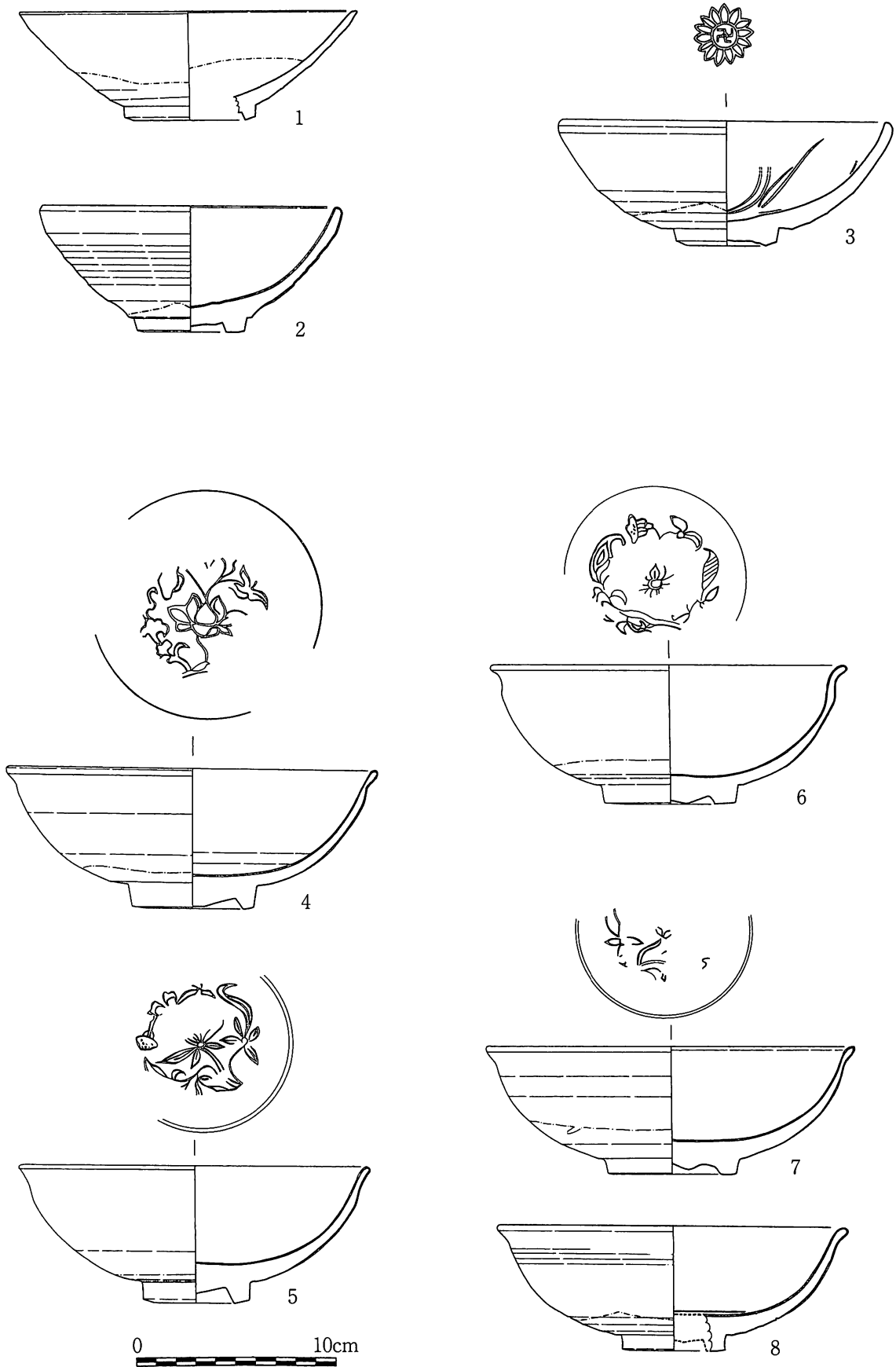


図6 今帰仁城跡主郭第2層下部出土白磁碗 (S=1/3)
 今帰仁タイプⅡ類(1)、ピロースクタイプⅡ類(2・3)、ピロースクタイプⅢ類(4~8)

に「」の調査である。今回は特に今帰仁タイプとビロースクタイプの生産地特定が主目的であった。前述のとおり筆者は20年以上ビロースクタイプと今帰仁タイプの研究を続けてきた。その生産地を実見できる時が来たのである。

9月3日、福建省博物院考古学研究所の採集陶磁器の調査から始めた。主に栗建安所長が古窯から採集した陶磁破片である。その陶磁器を見て、沖縄出土の陶磁器に類似するものが多く確認された。特に白磁大型外反碗（第4図8）と同類のものが甫田市庄辺窯で焼かれていることに注目した。

9月4日、連江県浦口窯の調査である。浦口窯からは今帰仁タイプが出土することは田中克子が報告⁽⁵⁾しているので、今回現地確認できることに大きな期待を持っていた。浦口の上元窯、西山窯、窯庫窯を調査し、いずれの窯跡からも今帰仁タイプのⅢ類は確認されたが、明確なⅠ・Ⅱ類は確認できなかった。しかし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類は僅かな違いであり、器形、素地、施釉方法などはほぼ同じであるので、今帰仁タイプは浦口窯産であると確認した。ちなみに、上記田中報告の第4図15は今帰仁タイプⅠと考えられる⁽⁵⁾。

9月5日、閩清県義窯の井后崗窯、老猫坑窯の調査。井后崗窯では沖縄で出土する11世紀後半から12世紀の白磁玉縁碗、白磁端反櫛描文碗など古手の陶磁器が多い。この古手の白磁碗は器形、素地、施釉方法など沖縄出土の白磁碗と同じと確認した。白磁玉縁碗については、これまで同安窯系とする研究者が多かったが、今回井后崗の白磁碗を実見して閩江系と考えられる。井后崗ではビロースクタイプも1点確認できた。

老猫坑窯は道路工事で破壊されていたが、崖下に陶磁器や匣鉢などの窯道具が散布しており、窯跡であることが理解できた。その中にビロースクタイプⅠとⅡが多く見られた。しかも古手が見当たらず、すべてビロースクタイプである。ついにビロースクタイプの窯跡が確認されたのである。あとはビロースクタイプⅢの確認である。その可能性を最後の調査に期待した。

9月6日、青窯窯隔の調査である。青窯は閩江の支流安仁溪に造られたダムの西側にある洪芸村からダム沿いに約2 km南下した所にある。そのダムを挟んで東側ダム沿いに前日調査した老猫坑窯がある。窯隔ではビロースクタイプⅠ、Ⅱと、期待のⅢも確認できた。沖縄出土のビロースクタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲは安仁溪を挟んで西の窯隔、東の老猫坑窯などで生産され、閩江を下って琉球まで運ばれたと考えられる。

9月7日、3日間で採集した陶磁器を福建省博物院で特に今帰仁タイプ、ビロースクタイプを中心に分類、実測、写真撮影。洗浄した陶磁器の中で、ビロースクタイプⅡで内体面に2本線による幅広蓮弁と内底に印花菊花文のあるのが青窯窯隔で多く採集された。以前栗氏の採集したものにもみられる。このタイプは現在のところ今帰仁城跡（23ページ第2図6）と住屋遺跡（23ページ第2図7）で出土しているのみである。

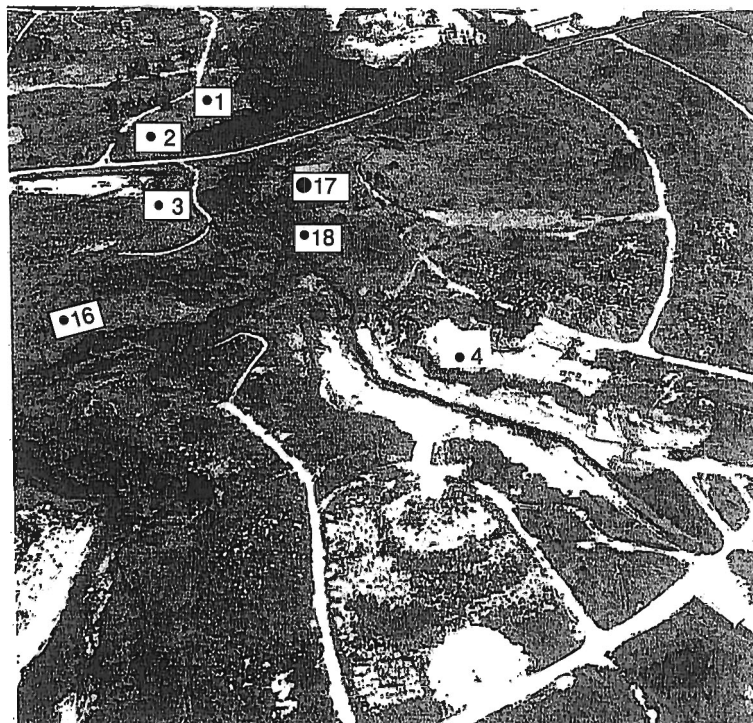
今回の調査で今帰仁タイプやビロースクタイプの生産窯がほぼ確定されたことで、生産地中国と消費地琉球の交易関係の研究が大きく前進したと考えられる。

4. 今帰仁タイプ・ビロースクタイプ白磁碗の貿易港の研究課題

中国の貿易港は生産地が閩江の近くであることから福州港が有力と考えられるが、泉州港も有力であり、広く福建とし、ここでは琉球の貿易港について考えてみたい。

今後の大きな課題として琉球の貿易港の特定が急がれる。その中で、那覇港（渡地地区）の発掘調査が2005年度に沖縄県埋蔵文化財センター、2006、2007年度に那覇市教育委員会文化財課によって発掘調査が実施され、現在資料整理が続いている。この調査で

那覇港が14世紀後半から15、16…そして現在まで貿易港として使われたことが明らかとなった。これは琉球の対外貿易を考える上で実に大きな成果である。『李朝實録』の中に「市は江辺に在り。南蛮・日本国・中原の商船来り、互に市す。」⁽⁶⁾とあり、江辺とは那覇港の埠頭一帯で、そこで市が開かれていたのである。那覇港が国際貿易港であることを示す重要な史資料である。しかし、12世紀から14世紀前半までの貿易港はまだ不明である。那覇港の前は泊港で、その前は牧港であったと歴史研究者は述べているが、その証拠はない。筆者は安謝川に注目している。安謝川河口から上流に向かう右手に多和田川（タータガーラ）という支流があり、多和田川の上流では銘苅川（メカルガーラ）と大湾川（オオワンガーラ）の二つの支流に分かれる。これらの支流に面する丘陵上に12～14世紀前半の遺跡がいくつも形成されている。多和田川の南岸丘陵上に安謝前東原遺跡・安謝東原南遺跡⁽⁷⁾、北岸丘陵上に銘苅原遺跡⁽⁸⁾・銘苅原南遺跡⁽⁹⁾、銘苅川の



◎沖縄先史時代中期（縄文晩期相当）の遺跡

- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1 安謝前原遺跡 | 4 嶺名園内遺跡 | 6 城岳貝塚 |
| 2 天久遺跡 | 5 嶺名貝塚 | 7 ガジャンピラ丘陵遺跡 |
| 3 山川貝塚 | | |

●グスク時代の遺跡

- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1 安謝東原遺跡 | 8 首里城跡 | 15 虎川原遺跡 |
| 2 安謝東原南遺跡 | 9 崎山御嶽遺跡 | 16 銘苅直根原遺跡 |
| 3 安謝前東原遺跡 | 10 魚下原遺跡 | 17 銘苅原遺跡 |
| 4 ヒヤジョー毛遺跡 | 11 石田グスク | 18 銘苅原南遺跡 |
| 5 天久グスク | 12 石田遺跡 | 19 三重グスク |
| 6 首里西森遺物散布地 | 13 シーマ御嶽遺跡 | 20 波上遺跡 |
| 7 五陵南側洞穴遺跡 | 14 嶺名原遺跡 | 21 牧志御船東方遺跡 |

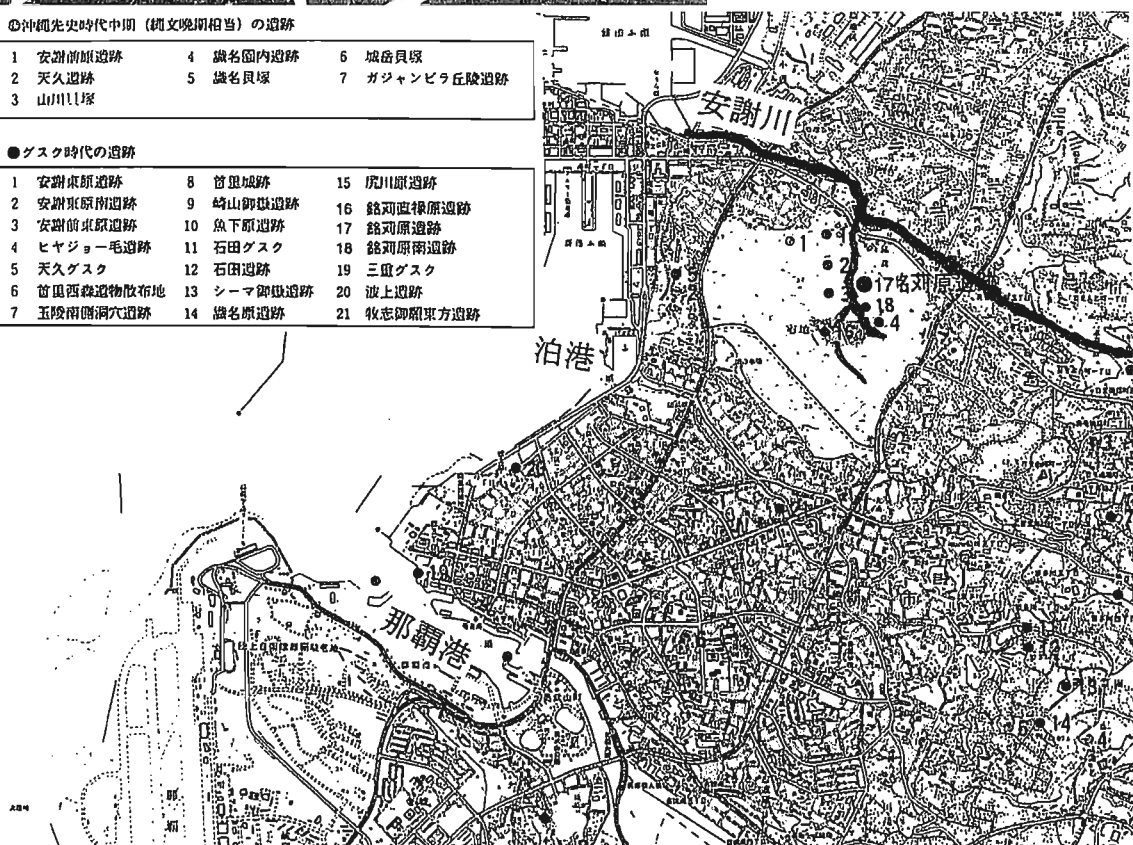


図7 那覇市と浦添市の境を流れる安謝川の支流に集中する12～14世紀前半の遺跡群

北岸丘陵上にヒヤジョー毛遺跡⁽¹⁰⁾、大湾川の西岸に直禄原遺跡⁽¹¹⁾が形成されている(図7)。

これらの遺跡からは12～14世紀前半の白磁玉縁碗、青磁劃花文碗、カムイヤキ須恵器、今帰仁タイプ、ピロースクタイプなどが多く検出されている。このことから安謝川に貿易船が入港し、そこから支流沿いに上陸し、そこに多くの遺跡が形成されたと考えられる。今後港の発掘調査によって物的証拠が期待される。

もう一つの貿易港の問題が先島の貿易港である。八重山では与那国の慶田崎遺跡⁽¹²⁾、与那原遺跡⁽¹³⁾、竹富島の新里村遺跡⁽¹⁴⁾、石垣島のピロースク遺跡⁽¹⁵⁾など、宮古では住屋遺跡⁽¹⁶⁾、高腰城跡⁽¹⁷⁾、尻川遺跡⁽¹⁸⁾などで出土している。時代は新しくなるが、石垣島名蔵湾のシタダル海底遺跡^(19・20)で15世紀の中国陶磁器が大量に発見されていることから、貿易船が名蔵湾一帯に入港したと考えられる。このことから、13～14世紀にも同じように貿易船の入港が考えられる。

福建→与那国島→石垣島→宮古島→沖縄島を結ぶルートも考えられるが、福建→八重山・宮古と福建→沖縄島の2ルートも考えられる。さらに各島が直行ルートで福建と貿易するルートも考えられる。現在のところルートを断定することはできないが、福建と琉球列島が琉球の公貿易以前の13世紀後半～14世紀前半に盛んに交易したことは今帰仁タイプ・ピロースクタイプの陶磁器からみて、紛れもない事実である。

注

1. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991
2. 朱伯謙主編『龍泉窯青瓷』藝術家出版社 台北市 1998
3. 『新安海底遺物』文化公報部文化財管理局編 同和出版公社(ソウル) 1983
4. 『中国朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部(一)』図書刊行会編 1975
5. 田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁」『博多研究誌』第10号 博多研究会 2002
6. 嘉手納宗徳「李朝実録抄解題」『日本庶民生活資料集成』第27巻 三一書房 1981
7. 島弘・玉城安明・仲宗根啓他『安謝東原南遺跡』那覇市教育委員会 2000
8. 金武正紀・島弘・玉城安明・仲宗根啓他『銘苺原遺跡』那覇市教育委員会 1997
9. 當間麻子・當銘由嗣・仲嶺久里子『銘苺原南遺跡』那覇市教育委員会 2002
10. 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会 1994
11. 樋口麻子・當銘由嗣・仲宗根久里子『銘苺直禄原遺跡』那覇市教育委員会 2003
12. 金武正紀・大田宏好他『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会 1986
13. 金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会 1988
14. 金武正紀・島袋洋・金城亀信他『新里村遺跡』沖縄県教育委員会 1990
15. 金武正紀・阿利直治他『ピロースク遺跡』石垣市教育委員会 1983
16. 大橋康二他『住屋遺跡(1)』平良市教育委員会 1999
17. 盛本勲・手塚直樹他『高腰城跡』城辺町教育委員会 1989
18. 砂辺和正・宮城ゆりか他『尻川遺跡』平良市教育委員会 2003
19. 『石垣島の遺跡』沖縄県教育委員会 1979
20. 石垣市史考古ビジュアル版5『陶磁器から見た交流史』石垣市 2008